

宇田英才教室

ウェブマスター 宇田雄一

The Status of the Academia in the Context of Screening

<http://www.f3.dion.ne.jp/~x-wooder/>

Yuichi Uda

民主党政権によって 2009 年 11 月に実施された事業仕分けでは、必要性や費用対効果の観点から、学問の研究というカテゴリーに属する事業は、随分と批判を受けた様だ。これに対して、学界の側からの反論は、あまり上手に為されなかった、と思う。学問の研究では、これだけのお金を掛ければこれだけの成果が出せるという法則性が、ハッキリは分からない、という風に反論していた人は居た。しかし、そもそもその成果は必要なのか、という批判に対しては上手く答えるのを見た事が無い。そこで今回私は、そういう批判に対する反論を発表する。今回私が発表する考え方は、今年(2012年)に入ってから私が思い付いたものであり、事業仕分けの時期には私も、どう答えるべきか分からなかった。学会から意見を募るメールが来た時にも、まだ分からなかった。人間社会を人体に喩えると、学界は大脳新皮質の特定の部位に喩えられ、学者は大脳新皮質のその部位の神経細胞に喩えられるだろう。大脳新皮質を持たない生物だって立派に生きているから、大脳新皮質の必要性は明確ではない。しかし、人間にとって大脳新皮質も必要である事は明らかだ。もし、費用対効果の算定に従って大脳新皮質への血流をコントロールしたら、色々と弊害が生じるだろう。計り知れないのが大脳新皮質の働きだからだ。そこで、学界への資金供給量の算定に当たっては、人体において脳の血流が全体の何パーセントを占めるのか、といった事を、参考にしてはどうか。Wikipediaで調べると、脳の血液の循環量は心拍出量の15%、酸素の消費量は全身の20%、グルコースの消費量は全身の25%だ、と分かった。ただし学界は、脳の全体にも大脳新皮質の全体にも対応せず、もっと小さい部位に対応するだろうから、それは脳全体の何パーセントぐらいか、という問題も考える必要がある。特に民主主義社会では、全ての人が脳の機能を担っていると考えられるので、その分学界の占める割合は低く成るだろう。因みに、小脳が政府、脳幹が行政ぐらいではないか。民間の事業でも、文化的なものや知能的なものは、大脳新皮質に対応するだろう。人体において食事や呼吸が足りない時に栄養や酸素がどこに優先的に回されるか、という事も参考にすべきだ。血流の割合を手掛かりに必要性概念を精緻化する、というアプローチも良いと思う。